

六花

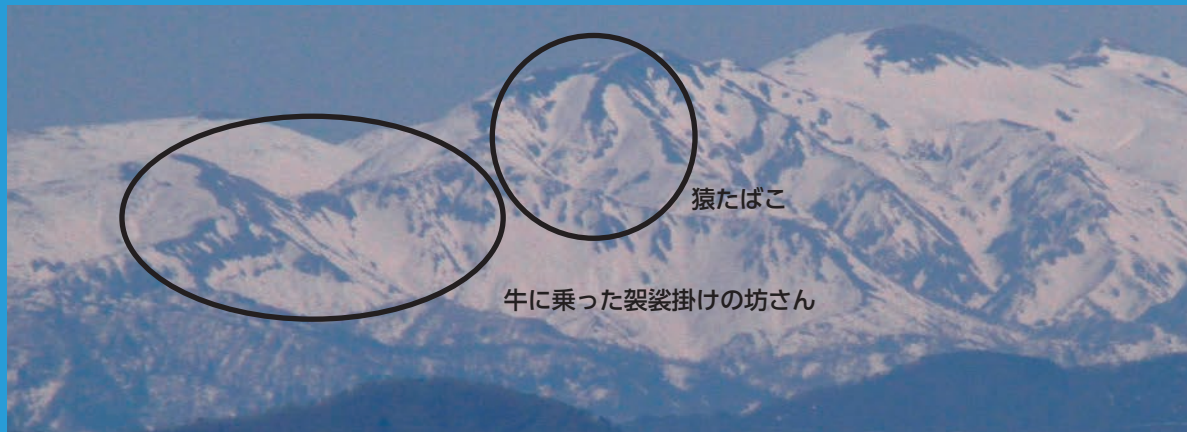
ROKKA

第61号
2024年6月

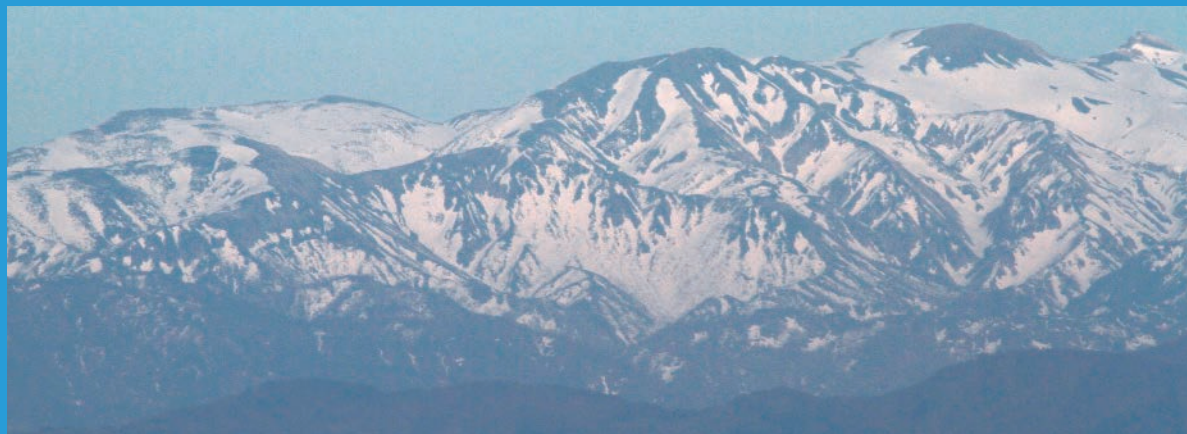
ろっか（題字 矢田松太郎氏）

白山の雪形の推移（2024.4.13～5.4）

4.13は富塚町，4.25と5.4は豊町から。撮影:北口由美子



4.13 「牛に乗った袈裟掛けの坊さん」が良く整った。「猿たばこ」の猿とたばこが未だ分離していない。



4.25 猿とたばこが分離し「猿たばこ」が整った。「牛に乗った…」は、牛の目（白い部分）が消えた。



5.4 「猿たばこ」は少し痩せたが良い形だ。「牛に乗った…」は、「大ガラス」に変身した。

p 4～5 「白山の雪形－ウォッチングと出現判定」を参照下さい。（神田）

札幌国際芸術祭2024 | LAST SNOW を機に娘と札幌へ

森田 菜絵(東京都会員)

今年の1月から2月にかけて、37日間にわたり札幌市内各所で札幌国際芸術祭(SIAF)2024が開催されていました。札幌初の国際的なアートフェスティバルとして10年前に始まったこの芸術祭。2014年の初回はゲストディレクター坂本龍一氏のもと、宇吉郎の火花放電と雪結晶の写真がジークレープリントというかたちで北海道立近代美術館に展示され、別会場では中谷芙二子さんの霧の彫刻と関連シンポジウムも開催されるなど、宇吉郎の仕事を芸術的な観点からも再考できる貴重な場となっていました。

4回目(うち1回はオンライン開催)となる今回のテーマは「LAST SNOW-はじまりの雪」。初の冬開催ということもあり、札幌とは切っても切れない「雪」をインスピレーションの源泉として、そこから未来を一緒に考えようという呼びかけのようでした。メインビジュアルにも、どこか未来的なトーンの雪の結晶が大きくあしらわれ、札幌拠点のアーティストが開発したアプリケーションによって「自分だけの雪の結晶」をつくるワークショップが市内12の小中学校で行われるなど、会期前から市民が参加しやすい仕掛けが随所に感じられました。

これらは古川義純館長が監修として協力されたそ

うですが、他にも古川館長が監修、中谷宇吉郎記念財団、雪の科学館、低温科学研究所が協力をした展示があると聞いたので、2月のある週末、思い切って真冬の札幌に娘と出掛けてきました。

メイン会場の一つ、「未来劇場」と名付けられた元劇場の建物の中で、100年後の未来に意識を飛ばすような作品群を体験したあとに、「今ある危機」という地球規模の気候変動や課題を象徴するようなシリアスな作品が続きます。その章の最後に、まさに《LAST SNOW》と掲げられた展示室があり、馴染みのある宇吉郎のことばと実験装置、ダイヤグラムなどが目に入ったときは、どこかほっと安堵するような気持ちになりました。

SIAF2024のメインビジュアルとアートディレクションを手がけたワビサビというチームによる洗練されたデザインの空間で、「中谷宇吉郎と人工雪の研究」「雪と札幌」「札幌という場所」「札幌市徽章」「これからの雪と研究-北海道大学低温科学研究所の探求-」と、順を追って理解を深められる展示となっていました。

監修者からのコメントとして古川館長が寄せられていた、“雪国に住む私達が、雪をとおして地球の未来を考える先達になるときののです。”という呼びかけが示唆するように、私のような外からの来訪者やアートファンだけでなく、実際に札幌に住む市民の方々にとっても、改めての発見や気づきの多い展示だったのでは、と想像します。



SIAF2024 公式ポスター 提供：札幌国際芸術祭実行委員会



左) 中谷の人工雪装置、右) 氷の宇宙実験装置など。アートディレクション:ワビサビ(LAST SNOW) © SIAF2024 撮影:藤倉翼

もうひとつ触れておきたいのは、同じ週末、SIAF LAB.として「IEIE, Reflected: Phase 4 | Virtual Ground」というプロジェクトの成果報告会が北大キャンパス内で開催されていたことです。プロジェクトの詳細はリンク先に譲りますが、こちらは中谷芙二子さん、そして2017年に加賀市と中谷宇吉郎記念財団が協働して始まった「かがく字かん」プロジェクトとも深いゆかりのあるもので、シンポジウムには古川館長も参加され、アートとサイエンス、テクノロジー、科学映画、アーカイブ・・・などをめぐる非常に興味深い議論が交わされていました。「かがく字かん」プロジェクト自体は、さまざまな事情で現在活動を休止しておりますが、こうして札幌の地で脈々とつながっていることを肌で感じられたのは、事務局を担当していた者としてもとても嬉しいことでした。

そして東京に戻る前に、今回の旅でどうしても訪れたかった若濱五郎先生のご自宅に古川館長のお車で訪問させていただき、ご家族とゆっくりお話しできたことは、何よりかけがえのない時間でした。7歳の娘にとっても、生まれて初めてあんなに積もった雪を自分の目で見て触れられて、ソリ遊びまでできて、忘れられない旅となったようです。



ランチの合間に娘は古川館長とソリ遊び



札幌国際芸術祭 2024
SIAF LAB. IEIE, Reflected: Phase 4
ヴァーチャル・グラウンド

「寅彦博士を朝ドラへ！」の署名運動

宇吉郎の恩師、寺田寅彦の記念館(高知市)友の会が標記の署名運動をしており、当会も応援しています。署名用紙は寺田寅彦記念館友の会のホームページからダウンロードできますので、ご協力お願いします。

札幌国際芸術祭のメインビジュアルの雪の結晶について

館長 古川 義純

森田さんの札幌訪問記の写真にも出てくるように、今年の冬に開催された札幌国際芸術祭2024 (SIAF 2024)のメインビジュアルは、見事な雪の結晶の画像で彩られています。この画像はもともと動画として準備されたもので、SIAF2024の開催前や開催中に、北海道ではテレビで盛んに流されていました。

この画像や映像は、一見すると天然の雪結晶そのものに見えますが、実際には人工的に作成されたものです。方法は、天然の雪結晶の写真の1枚から枝の一部を切り出し、それを元にいかにも実物の六花の結晶が成長をしているように再構成して作成したものです。長年雪の結晶の成長を研究してきた研究者も騙されるほどの出来栄でした。もちろん、詳細に見れば、実際の結晶ではありえないなと思えるところがないわけではありません。しかし、このような形で結晶の成長の様子をリアルに見せたものは、これまで例がありませんでしたので、そのインパクトは非常に大きかったと思います。雪の結晶に限らずどのような物質の結晶であっても、その成長の様子を観察した画像や映像は、それを見る人を感動させる魅力があります。それを人工的な方法で再現する試みとしてチャレンジングなものであったことは確かです。もちろんリアルな結晶の成長の記録とは区別すべきですが、芸術的な表現法の一つとして、とても魅力的であったと言えるでしょう。

SIAF2024は閉幕しましたが、その動画は現在もYouTubeで公開されていますので、ぜひ一度御覧ください。



札幌国際芸術祭 2024 "LAST SNOW" トレーラー

白山の雪形 —ウオッチングと出現判定

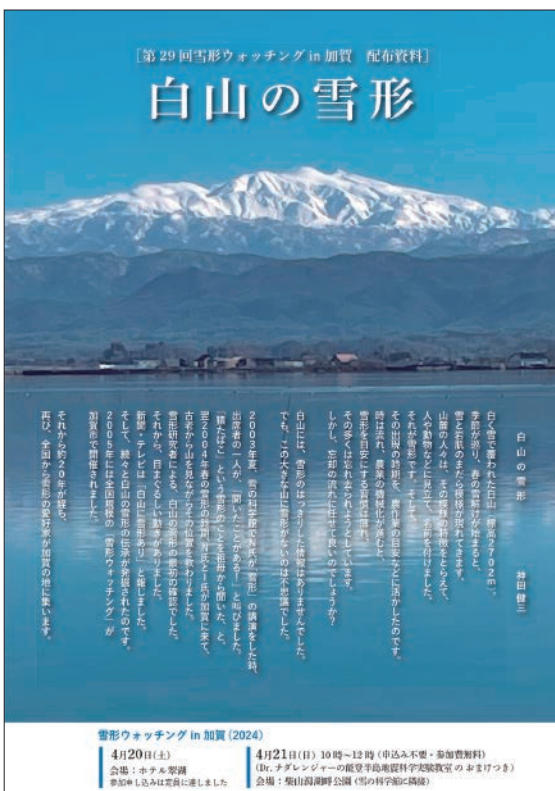
顧問 神田 健三

白山の雪形の伝承発掘から20年

山の雪が春になってとけ始めると、雪と岩肌のまだら模様が現れます。その模様を人や動物などに見立てて名前を付けたものが雪形で、人々はその出現を見て農作業を始める目安などに活かしてきました。農業の機械化が進み、目安としての意味は薄れても、雪形はこの時期の風物詩として、自然観察の楽しみを与えています。

白山の雪形については、田淵行雄『山の紋章 雪形』（1981）には、不明が1とあるだけでした。ところが、2003年の夏、雪の科学館が納口恭明氏（国際雪形研究会）による雪形の講演会を開いたとき、1人の参加者から、「猿たばこ」という雪形のことを聞いたことがある、との情報が寄せられました。そこで翌2004年の雪形の時期に、納口氏ら2名の研究者が加賀市を訪れ、古老から聞き取りを行って「猿たばこ」の位置を確認し、これが白山雪形の伝承発掘の最初となりました。

その後、研究者と館の連携、マスコミの報道などで、短い間に約10の雪形の存在がわかったのです。



雪形ウォッチングの配布資料（8pのパンフ）

加賀でウォッチング—全国から78名—

4月20日~21日、国際雪形研究会と日本雪氷学会北信越支部が主催し、雪の科学館が後援して雪形ウォッチングが加賀市で開催されました。同研究会の雪形ウォッチングは1995年以降今回で29回目、加賀市開催は2005年に続く2回目で、白山雪形の伝承発掘から20年の節目に開かれたのです。

20日、ホテル翠湖に全国から雪形の研究者やファンが集まりました。ロビーには雪形のパネルが並び、友の会の有志は氷釣りのコーナーを設けました。

夕食後、ミニシンポジウムなどが行われ、白山の雪形を中心に、各地の取り組みが紹介されました。

白山はその前日まで黄砂で全く見えない日が続きました。しかし、20日には久しぶりに雪形が見える時間がありました。翌21日には、早朝5時半頃、館内に「雪形が見えていますよ」とアナウンスが入り、参加者は続々とロビーに集まって雪形を見上げました。全館貸し切りだったのでできたことでした。



早朝、ロビーに集まって雪形を見る



ウォッチングのポーズで宿泊参加者の記念写真

21日は、雪の科学館横の湖畔公園に移動し、ここで当日だけの参加者も加わり、説明を聞きながらみんな雪形を観察しました。山頂付近は雲がかかり

ましたが、「牛に乗った袈裟かけの坊さん」の形はよく見えました。

続いて、納口氏(ナダレンジャーでもある)の「能登半島地震科学実験教室」があり、地震、液状化、津波などの現象をわかりやすく紹介した実験が行われました。その後、多くの方は雪の科学館に入館し、展示を見、実験、霧などを体験しました。



雪形の説明を聞く



「能登半島地震科学実験教室」を観る

雪形「猿たばこ」の出現判定委員会

—2024年の出現日は4月20日—

白山の雪形「猿たばこ」を広く知ってもらう活動として、出現判定委員会を設けて、加賀市方面から見た「猿たばこ」の形が整った時、桜の開花宣言のように「雪形出現宣言」を発表していくこととしました。判定の基準は「猿」と「たばこ」が分離し、形が整うこととし、雲や黄砂などで見えない日もあるので、平地から見えた最も早い日とします。今年の出現日は4月20日でした。

この目的は、雪形を楽しむ文化を醸成し、自然と文化の遺産としていくことですが、記録が蓄積すれば、気候変動との関係がわかってくるのでは、との期待もあります。

当面の委員は、神田健三、小川弘司、柏田剛明の3氏で、顧問に納口恭明氏をお願いしています。

(表紙の写真を参照下さい。)

能登半島地震で被災 入口を1階に移して開館

開館30年のはじまりでもあった今年2024年の元旦の夕方4時頃、能登半島地震が発生しました。マグニチュードは7.6で、津波や火災も発生し、能登地域を中心に甚大な被害をもたらしました。

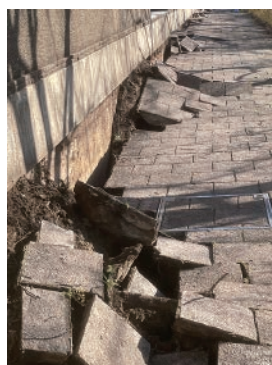
雪の科学館は開館していましたが、加賀市の震度は5弱と大きな揺れでした。しかし、館職員の適切な避難誘導もあり、人的被害はまぬがれることができました。館自体や展示・収蔵物の被害もほぼなかったのですが、館の外側では地盤沈下や地割れ、液状化などが多数発生しました。特に2階の入口につながるスロープや階段の盛り土部分が地盤沈下し、2階から入ることができなくなりました。

このためしばらくは臨時休館を余儀なくされましたが、職員の工夫と努力で、入口を1階に変えて1月4日から再開することができ、その後受付も1階に移しました。

館の外側は、危険は無いように対処してあります。本格的な修繕工事は加賀市が行うはずですが、年内の実施は難しいようで、長い目で修・改善を待つことになりそうです。



スロープと橋の間に大きな落差ができた



館の南側の沈下



1階の事務室内に臨時受付を設けた

私の宇吉郎コレクション

気象予報士・博士(工学)・石川県立大学 村井 昭夫

私の北見工業大学大学院(博士課程:2007~2012)での研究テーマは、雪結晶の生成条件を最新の測定装置を使って明らかにするというもので、中谷ダイヤグラムと深く関わっていた。

その研究過程では中谷先生本人の論文や著作はもちろん、研究に関わる周辺の方々の論文・資料、その人となりの物語、あるいは故・樋口敬二先生など中谷先生と関わる方々にも接する機会が多くなり、自然と「中谷先生に関わるものを手に入れたい」と思うようになっていった。

そこでネット・オークションはもちろん、古書店や古美術店の情報をチェックするなど、「中谷グッズ」の探索を続けるようになったのだが、ご縁もあって、これまでにいくつかの品を手にすることができた。ここでは私の宝物=宇吉郎コレクションのうち、中谷先生「自筆もの」5点を紹介したい。

写真1は雪氷学の歴史に残る中谷先生の名著：Snow Crystals -Natural and Artificial- (1954,Harvard)の表紙裏扉に書かれた中谷先生の献辞とサイン。古書販売サイト：Abe Booksで資料を検索中、商品説明に「表紙裏に著者のサインがある」という記述を見つけて、アメリカの書店から購入したもの。日付

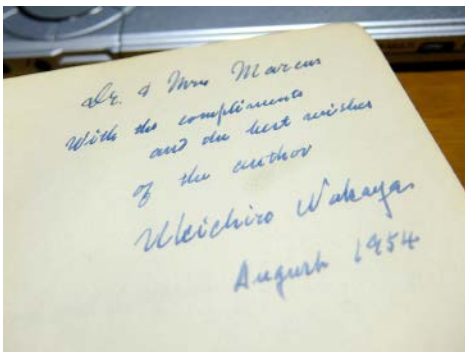


写真1



写真2

が1954年8月と本書の出版年となっていることから、出版後に渡米した際のものだと思われる。ここに書かれたMr. & Mrs. Marcusとはどのような人物なのかは未だにわかっていない。

写真2は北極の水(1958, 宝文館)とその表紙裏に書かれたサイン。ヤフーオークションに出品されていた本書の説明写真の中に、中谷先生のサインがあるのを見つけて落札したもの。中谷先生を知らない売り手にとってはあまり意味のないものだろうが、中谷シンパ(?)の私にとっては貴重なものである。

写真3は「雪華図」色紙。中谷先生の象徴とも言うべき雪華図の入った品を長い間探していたのだが、あるとき湯布院の古物商が売りに出したのを発見、急いで連絡を入れて入手した。説明によると湯布院在住の中谷健太郎さん(中谷宇吉郎の甥)所有のもの



写真3

だったとのことである。写真は金沢大学創基150年展(2010年)に貸出し・展示されたときのもの。

写真4は同じく「雪華図」の掛け軸。北海道のYさんから「知人から売却を頼まれたので買いませんか?」とお声がけをいただき、購入した。賛はよく知られた「天から送られた手紙」はなく、中谷先生の別の名句「一片の雪の中にも千古の秘密がある、、、」である点が大変気に入っている。



写真4

写真で回顧(その2) 開館20周年(2014)

これら中谷先生の雪華図2点は雪結晶の研究を行っていた私にとって憧れの品であり、数年間探し続けてようやく手に入れることができた特別な存在である。

写真5は中谷先生が学士院賞の推薦を受ける際に提出した自筆の「履歴書」(写真はその一部)。

ある日、北見工大の亀田先生から「某古書店に中谷先生の学士院賞関係の書類が売りに出ているから買ったらかどうか」との電話があり、あわてて当該の古書店に問い合わせたものの、そのときは既に売れた後だった。

ところが、それから数年経って、またもやYさんからこれを「買いませんか？」との連絡があり、驚きながらも買わせていただいた。

履歴書の他に当時の気象庁長官・藤原咲平への連絡書簡、推薦を受けるために提出した論文類、推薦委員の推薦書草稿などの資料が揃っていた。藤原咲平の関係者(遺族?)からの出ではないかと想像しているが、真相は分からない。

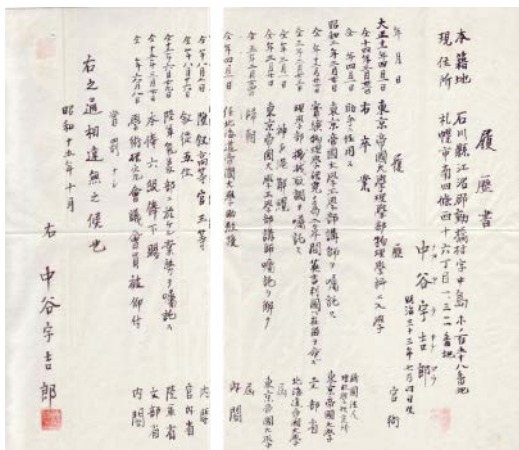


写真5

私はもちろん中谷先生と直接お会いしたことはない(私が1歳のときに亡くなられている)。しかし、中谷先生の手書かれた(描かれた)ものには、間違いなく中谷先生がそれと向き合った時間・瞬間がある。これらを眺めていると、時を超えて中谷先生とその時間・瞬間を共有できるような気がする。

愛知県刈谷市で土井利位展

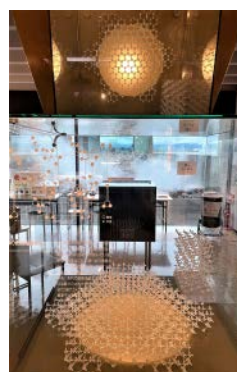
「雪華図説」を著し、雪の殿様で知られる土井利位は刈谷市の生まれです。刈谷市歴史博物館で10月5日(土)から11月17日(日)まで「刈谷生まれの雪の殿さま 土井利位」展が開催されます。

2013年度末で私(神田)は館を退職し、廣瀬幸雄氏が館長になりましたが、その後、私は市から館の20年の総括と展示室の改善について相談を受けました。そしてまとめた20年のあゆみが、エントランスホールに展示されました①。展示室の改善では、氷の分子模型の上に鏡を取り付けて六角形の構造が見やすく改善され②、展示パネル(最初の人工雪と天覧、雪の結晶の分類、南極)が製作・更新されました。又、チンドル像の実験がOHPから今の方式に変えられました。

11月1日、20周年記念式典がテリーナホールであり、宮元市長の式辞、感謝状贈呈(樋口敬二氏、友の会に)の後、池内了氏が「宇吉郎と寅彦」の題で講演し、アルバート・ロト、中谷三代子夫妻がピアノの連弾を披露しました③。同日午前には、友の会総会があり、新会長に選ばれた私から、それまでお世話になった役員等に感謝状を贈りました④。(神田)



①



②



③



④

中谷芙二子さん芸術院会員に

中谷宇吉郎の二女で、霧の彫刻で世界的にご活躍されている中谷芙二子さんが3月1日に日本芸術院新会員になりました。またさらに、春の叙勲にて旭日中綬章を受章されました。

芙二子さんのアート展は4/27～12/1姫路市美術館、5/19～8/11スイスのFONDATION BEYELERで開催中。その他の国での開催も検討されています。

年会費の納入について

本年度会費が未納の方には郵便振込用紙を同封してあります。年会費は1,000円ですが、振込手数料が割高なため、2年分2,000円の納入をお願いしております。

納入の方法は以下の3とおり。①、②の手数料はご負担願います。

- ①同封の振込用紙で納入
- ②ゆうちょ口座間の送金（記号13150番号13559841）
入金旨、館へご一報ください。
- ③雪の科学館に持参（多少遅れても結構です）

アイロンビーズコーナーを出店

3月23日(土)・24日(日)に北陸新幹線開通協賛としてアイロンビーズのコーナーを出店しました。



命日のお墓参り

4月11日は中谷宇吉郎の命日。この日は毎年、10時に現地集合でお参りしています。今年は好天に恵まれ、9名が墓前に手を合わせました。

主なスケジュール

【友の会主催事業】

- 6月30日(日) 科学館周辺の草むしり(申込不要)
7時30分館事務所前集合。草刈鎌、軍手等持参で
- 7月6日(土) 友の会定期総会
11時から片山津地区会館テリーナホールにて
お弁当を用意しますので、6月29日までに雪の科学館
か役員にご連絡ください。
- 7月21日(土) 雪と氷のワークショップin能美
会場：能美市立寺井地区公民館(石川県)、小学生対象。
- 8月11日(日・祝) 雪と氷のワークショップin石岡
会場：ふれあいの里石岡ひまわりの館(茨城県)、
小学生対象。

【雪の科学館主催事業】

- 7月27日(土) 10:30～12:20
北大低温研×雪の科学館 特別レクチャーシリーズ
「科学する心をさがす旅 Vol.2」
 - ・宇宙からの手紙の読み方 木村勇氣さん(低温研教授)
 - ・融ける南極の氷床 海の役割を探る 青木茂さん(同)
- 8月4日(日) 10:30～11:50「氷のワークショップ」
講師 神田健三さん(館顧問) 協力：友の会
対象 小・中学生(小学生は保護者も)
内容 自由研究にも役立つ実験紹介。①透明な板氷
を作る ②偏光板 ③チンダル像を作る 他
- 8月24日(土)・25日(日) 夏休み特別企画ワークショ
ップ「雪の結晶トートバッグ作り」
- 10月24日～11月24日 開館30年・新幹線開業特別
企画
 - ・パネル展「雪の科学館のあゆみ」
 - ・絵本原画展 はじめてのかがかく絵本「雪のふしぎ」
(絵本作家によるワークショップも開催)
 - ・科学映画上映会(詳細は館のHPで)
- 11月10日(日)「プログラミング教室」小学生対象
講師 竹俣一也さん(金沢工業大学教授)ほか5名
- 12月14日(土) 開催予定
金沢学院大学学生によるクリスマスワークショップ

編集後記

2024年はいきなりの地震で明けました。被災された方々にはお見舞い申し上げます。同じ石川県内とはいえ、加賀地方の被害は能登からみれば軽微で済みましたが、液状化はあちこちで発生。かつて納口さんの指導で作った科学おもちゃ「エッキー」が自宅にあり、その説明に大活躍。防災科学の大切さを改めて実感しました。T.K.